



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<書評>M. B. ネチキナ 「デカブリスト運動」 M. B. Нечкина, Движение декабристов. Изд. АН СССР. Москва, 1955
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 3, 133-138
Issue Date	1959
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4943">https://hdl.handle.net/2115/4943</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113136.pdf



—〈書 評〉—

M. V. ネチキナ「デカブリスト運動」

M. V. Нечкина, Движение Декабристов, Изд-во АН СССР  
Москва, 1955

外 川 継 男

「デカブリスト運動」の歴史はソヴィエトの歴史学の中でも比較的その研究の進んでいる分野の一つと思われますが、本書はネチキナ女史の三十余年にわたる研究の成果であるとともに、ある意味では従来のソヴィエトのデカブリスト研究(декабристоведение)の集大成とも言ふことの出来るもので、今後の研究においていわば出発点ともなるべきスタンダードな概説と思われます。

「デカプリス運動」の研究はひとりソヴィエト史学においてなされているだけではなく、アメリカではたとえば Mazour<sup>1)</sup> や Adams<sup>2)</sup> が、イタリアでは Venturi<sup>3)</sup> が近年その研究を発表していますし、わが国でも岩間<sup>4)</sup>、小林氏<sup>5)</sup>らによって論文が、阿部氏<sup>6)</sup>によって紹介が書かれています。それらと比べてみる時本書はきわめてソヴィエト的であってその意味においても

1) A. G. Mazour. *The first Russian revolution 1825. The decembrist movement, its origins, development and significance.* California, 1936.

2) A. E. Adams. *The character of Pestel's thoughts.*—«The American Slavic and East European review», Philadelphia, 1953, Apr., V. 12, No. 2, p. 153-160.

3) F. Venturi. *Il populismo russo.* Einaudi, 1952. *Il mote dekabrista e i fratelli Poggio.* Torino, 1959.

4) 岩間徹, «デカブリストの性格», 東京女子大学「論集」第 III 卷, 第 2 号, 1953, その他.

5) 小林宗三郎, «ナポレオン戦後におけるロシア愛国思想の結集と展開», 経済集志 26, 1957, その他.

6) 阿部重雄, «ペステリの経済思想», 史学雑誌, 第 61 編, 第 2 号, 1952.

今後のわれわれの研究の幾多の参考となるものを示しているように思われます。

なお本書については「歴史の諸問題」の 1956 年第 10 号に C. B. Окунь がかなり内容の詳細に立入った書評を書いていますので、これをもあわせて紹介しながら、本書の内容と問題点を指摘してみたいと思います。

\* \* \*

まず著者は本書の冒頭においてかなりの頁をさいてデカブリスト研究の歴史を回顧し、資料・参考文献の紹介をおこなっていますが、五十頁にわたるこの章は研究の概観を知る上で、きわめて有益です。著者によればデカブリスト研究の歴史は、マルクス主義以前とマルクス主義以後とに大きく二分されますが、それはレーニンのデカブリストに対する評価にもとづきます。今日のソヴィエト史学におけるデカブリスト研究の視角はいずれも何らかの意味でこのレーニンの評価に依拠していると言えますが、著者は特にその中でもデカブリストの共和主義思想と農奴制廃棄の志向を中心と考えて、本書においてもこの二つを運動を貫ぬく二筋の糸として全体の叙述を進めています。

この研究史を読みますと、われわれはあらためてデカブリスト研究の歴史がそのまま帝政ロシア及びソヴィエトの歴史と不可分に結びついていることを感じざるを得ません。たとえばその一例として著者による M. H. ポクロフスキー批判の叙述をあげることが出来ましょう。みづからもこの時代にデカブリスト研究をすでに発表していた著者は、1939 年ポクロフスキーの死後編輯された批判の中でデカブリストの項を受持っていますが、言うまでもなくこの批判は

1936年初頭の党中央委員会と人民委員会議の批判にもついでおこなわれたものでした。本書においても、この批判に触れながら、著者はポクロフスキーの立場を「経済的唯物論」と規定し(T. I., стр. 31), その見解が如何にレーニンの規定に無縁なものであるかを強調しています。そして現在でもポクロフスキー学派の影響がデカブリスト研究から完全に拭われたとは言いがたいと言いついで(там же, стр. 43), また率直に研究の困難さが豊富すぎる資料の選択にあり、今後は計画的に基本問題をえらんで、集团的に研究を行うことが重要であろうと言いついでいます。たしかに従来の研究においては、あらかじめ抱いている一定の視角のもとに、自分に都合のよい証言なりメモワールの一部なりを任意に選んで叙述を推し進める傾向が強かったように思われますが、本書もこの点について全く欠陥がないとは言いがたいように思われます。

それでは本書において著者はどのような問題を基本的問題としてあげているかと申しますと、それは次の四つの項目にしばられます。(там же, стр. 47)

- (1) デカブリストの運動は如何なる根から成長し、如何なる歴史的土壌を養分としたか。(第二章)
- (2) 運動とそのイデオロギーは如何なる段階的發展をみたか。また各々の組織は運動の發展段階の中で如何なる特徴を有していたか。(第三～十四章)
- (3) デカブリストの蜂起は如何にして準備され、その経過と結果はどうであったか。(第十五～十九章)
- (4) デカブリスト運動はロシアの革命運動の中で如何なる客観的位置を占めるか。(第二十章)

著者はこのような基本的テーマのもとに以下第二章から第二十章までの叙述を進めていますが、「デカブリスト運動の客観的課題」と題する第二章においては、この運動をフランス革命に始り、パリ・コンミュンに終る一連の反封建闘争としてとらえようとしています。しかしそれと同時に著者はロシアの特殊性として、その

広大な領域、古くからしっかりと固められた農奴制のきずな、中央集権の形をとった強力な専制国家、そして革命的なブルジョワジーの欠如を指摘して、それらがデカブリスト運動にさまざまな困難と複雑さをあたえたと言いついでいます。(там же, стр. 80) そして特権と保護とを与えられていたロシアの産業ブルジョワジーの弱体と反動性を強調しながら、それよりもむしろ下からのもり上りとも言うべき農民騒乱の増加を指摘し、19世紀第一四半紀中最も騒乱の多かった1816-1820年の時期に奇しくもデカブリストの最初の組織が生れたことは興味深いと述べていますが、(там же, стр. 72-73) これは著者の批判したポクロフスキーの「経済的唯物論」の影響が完全に拭われたとは言いがたいことを示しているのではないでしょう。

ついで第三章において著者はデカブリストのイデオロギーの形成に大きな影響を与えたものとしてラジーンチェフ以来のロシアの進歩的思想家の役割を強調し、(там же, стр. 84 и др.). デカブリストの運動はあくまでもロシアの現実から生れたのであって、西欧やアメリカの革命思想・革命運動の影響を過大に評価してはならないと著者はくりかえし述べています。(там же, стр. 115-116) しかしオークニも正しく指摘しているように、近年ソヴェト史学において目立って見られる西欧思想の影響の無視ないし軽視の傾向は今後反省される必要があるように思われますし、事実その反省の行われていることは、オークニの指摘や「歴史の諸問題」1955年、第9号の巻頭論文にうかがうことが出来ます。デカブリストが逮捕された後に「審問委員会」が彼らに課した経歴を質すアンケートの第七項はその革命思想の由来をたずねたものですが、それに対するデカブリスト自身の答によって私達は彼らの思想に西欧の社会思想が大きな影響を与えたことを認めることが出来ます。そしてこの事は彼らの思想を形成する上でプラスにこそなれ、決してマイナスになったとは考えられません。しかし思想的影響とか相互関係とかいうものはかなり複雑なものであって、オークニも指摘していますがその解明が本書におい

て十分になされているとは考えられません。

このことはたとえば、ペステリの革命思想の発達を知る上で重要と思われる «Практические начала политической экономии» と題するノートの扱い方の態度についても言うことが出来ましょう。従来このノートはマズーア、シチパーノフ、ニカンドロフ、リヤシチェンコらによってペステルの著作として取上げられてきたものですが、近年ネチキナをはじめフェイエルシュティンやスィロエチコフスキーによって本書がペステリの著作ではなくその師たるペテルブルグ大学教授ゲルマンの講義のノートであると推定され問題となっていたものです。しかしネチキナもみずから認めているように肝腎のゲルマンの講義をデカブリストが筆記したノートは殆ど残っていないので、(там же, стр. 444) この点の解明は今後に残されていると言えましょう。それでは何故このノートがペステリの著ではないと主張されるようになったかと言いますと、そこにはマズーアが指摘しているように、<sup>1)</sup> 西欧の経済学者、特にアダム・スミスやシスモンディの影響が大きいということと、その中にはまた «農奴制の廃止は一日でなるものではなく云々»<sup>2)</sup> という考えが述べられていることに基因しているようです。つまりペステリの革命性を高く評価せんとする場合に本書をペステリの著作と認めることは甚だうまくないという点からそもその問題提起がなされているわけですし、またこれをペステリの著作と認めると後に彼が審問委員会でなした証言とくい違うことになるという論証の仕方も十分人を納得させる力を持っていません。しかしたとえこれがゲルマンの講義の筆記にせよ、それがペステリの手になる以上何時頃書かれたかということが問題になります。ネチキナは、1809-1810年と言っていますが(там же, стр. 118)、これはニカンドロフやシチパーノフのいう 1817年

1) A. G. Mazour. op. cit., p. 109.

2) *Избранные социально-политические и философские произведения декабристов*, Московский университет, т. II, 1951, стр. 18.

頃、<sup>1)</sup> またマズーアやリヤシチェンコのいう 1819-20年の時期<sup>2)</sup>よりはるかに早い時期にさかのぼらせることになり、この点も今後はっきりさせねばなりません。

次に著者はデカブリストの最初の結社たる *Союз спасения* に先行する四つのサークルについてかなり詳しく記していますが(там же, стр. 118-140)、従来これらのサークルの研究はその困難さから比較的小おそかにされていただけに、この記述は甚だ有益です。ただ今迄この問題はデカブリストとフリーメーソンとの関係において扱われて来たのですが、著者の叙述もこの点に関しては不明確・不十分のそしりをまぬがれません。たとえばこれらのサークルの一つである «Орден русских роцарей» について著者は、それが形式的には複雑なフリーメーソンの形をとってはいたが、実はクーデターを目的とする政治結社であったと言っているにとどまります。(там же, стр. 134)

*Союз спасения* の焼却されたプログラムについては、著者は種々の証言からその内容を推測していますが、ここで著者はデカブリスト運動の全段階を通じて確固として存在した農奴制と専制政治廃棄の志向が、すでにこの時期にはっきり確立していたと述べています。(там же, стр. 152) しかし後に問題となる立憲君主制か共和制かという点については、この時期には圧倒的に前者の考え方が強ったことを認めています。(там же, стр. 153, 156) 著者によれば、デカブリストがその結社の名において共和制をはっきり打ち出したのは、次の *Союз Благоденствия* の幹部会(Коренная управа)による 1820年初頭のペテルブルグ会議であります(там же, стр. 288)。このことは著者がみずか

1) П. Ф. Никандров, *Мировоззрение П.И. Пестеля*. Изд. Ленинградского университета. 1955, стр. 50; *Избранные социально-политические и философские произведения декабристов* т. II, стр. 515.

2) A. G. Mazour. op. cit., p. 109; П. И. Лященко, *История народного хозяйства СССР*, Госполитиздат, 1952, т. I, стр. 466.

ら執筆しているソ同盟史第二巻においても、しばしば強調されているところですが、<sup>1)</sup>しかしこの記述はもっぱら審問委員会におけるペステリの証言<sup>2)</sup>に負っているのです。しかしオークニが指摘しているところによりますと、ここでネチキナはこの会議に出席していた M. ルーニンの証言を全く無視しています。ルーニンの解するところによれば、この会議の席上でニコライ・ツルゲーネフが「Le president, sans phrase!」と言ったのは、必ずしも共和制に賛成したということではなく、何よりも専制政治に反対すること、立憲政治を導入することが問題だったということになります。ペステリも証言していますように、Φ. グリンカはこの会議ではっきり立憲君主制を支持していますし、更にニキータ・ムラヴィヨフがこの会議のすぐ後でその立憲君主制の憲法草案を作製し始めていること、更にまたこの会議の議長であった Φ. トルストイが会議の直後に脱会することなどをあわせて考えますと、デカブリストが結社の名において共和制を決議したというネチキナの主張は余り意味を持たなくなるように思われます。むしろオークニも言うように、このペテルブルグ会議は幹部会のメンバー間の意見の相違を示すものと考えられますし、またこのように考えてはじめて、結社の解散と再組織を決めた翌 1821 年初頭のモスクワ会議の意味もよくわかってくるように思われます。

著者は第五章第三節において「Зеленая книга」と呼ばれる Союз Благоденствия の規約の内容を詳細に述べています。(там же, стр. 203-212) この「Зеленая книга」には第一部と第二部とがあるのですが、著者は特に結社の名においては確認されることのなかった第二部を重視し、種々の証言からその全貌を明らかにしようと努めています。その目的が達成されたとは言いがたいと言えましょう。また第

1) *История СССР*, том II, Россия в XIX веке, Москва 1954, стр. 119.

2) *Избранные социально-политические и философские произведения декабристов*, т. II, стр. 169-170.

一部についても、これとプロイセンの Tugendbung の規約との関係も不明瞭ですし、(この点マズーアははっきり “closely copied” と言っています)<sup>1)</sup>決して模倣ではないとの著者の主張も根拠あるものではありません。(там же, стр. 202)

デカブリスト運動の革命のプログラム中、最も重要と思われるペステリの「ルースカヤ・プラウダ」と、ニキータ・ムラヴィヨフの憲法草案については、著者は特に二章を設けて(第十、十二章)その成立の経過と詳細なヴァリエントの研究を行っています。しかしペステリの「ルースカヤ・プラウダ」がデカブリストの南方結社によって正式に採択されたのに対し、ムラヴィヨフの草案が北方結社によって認確されたものではないことを、著者はまず強調しています。(там же, 426)

このムラヴィヨフの憲法草案には三つのヴァリエントがありますが、その中で屢々問題となる農奴解放と土地分与の点について著者は、第一、第二ヴァリエントと第三ヴァリエントとの相違を重視し、後者においては「地主の土地は彼らに残される」との前者の主題が消失していることを強調します。(т. II, стр. 66) そして前者においてはデカブリストの階級的限界がはっきり見られるが、それでもなおこれを 1806 年の「自由耕作者に関する勅令」と比較するならば、農民が土地を購入することを妨げないばかりか、無償で農奴に自由を与えることにおいてはるかに進んでおり、ここに封建的土地所有はその基礎を失いブルジョワ的土地所有が生れることになると言っています。(т. I, стр. 386) これがいかに第三ヴァリエントになりますと、不十分ながら土地つきの(2 デシアチーナ)解放にかわっており、ここにおいてムラヴィヨフは将来のロシアの農民経営を小フートル経営(Мелкое хуторское хозяйство)となるべく予想するようになってきたと述べています。(т. II, стр. 66)

しかしこの点については多くの異論がありま

1) M. G. Mazour, op. cit., p. 72.

す。たとえばガボフは第一第二ヴァリエントにおける農民が移動するに際しての地主への補償の条項を重視し、これによって農民は以前同様農奴の状態にとどまることになる旨指摘し、更に第三ヴァリエントにおいてすら、その目指すところは殆ど土地なき解放であって農民はいぜんとして同じ地主の下で仕事を求めねばならず、封建的農奴制的諸関係は未だに保持されていると主張しています。<sup>1)</sup>同様の見解はマズーアにも見られますが、この点について彼はムラヴィヨフが農奴制を否定しながらも他方では農民に猫の額ほどの土地を与えることによって、事実上農民は地主の支配下にとどまらざるを得なくなり、これはムラヴィヨフにおける矛盾のあらわれであると言っています。<sup>2)</sup>またリャシチェンコもこの点に関して、第三ヴァリエントにおいて土地分与の規定をなさしめたものが、農民のプロレタリア化に対する懸念ではあったが、しかし分与地の狭小さに対する懸念はなかったのであって、ここにデカブリストの階級的限界と更にそのブルジョワ的自由に対する無批判な態度が見られるとしています。<sup>3)</sup>このようにこの三つのヴァリエントのそれぞれをどのように考えるかということは、未だ今後研究の余地がありますが、ネチキナの言う《小フートル経営》というのは甚だ厳密を欠く表現であると思われる。更に著者はムラヴィヨフのかかる規定が資本主義発達のプロシア型を志向しているのではあるまいかとの疑問に対しては次の理由をあげてこれをしりぞけていますが、それとても十分納得のゆく説明にはなっていません。

(1) プロシア型のロシア版ではその保存が必要とされる共同体の土地所有を否定していること。

(2) 地主への多くの譲歩にもかかわらず、この規定は絶対主義を擁護するものではなく、

1) Г. Габов, *Общественно-политические и философские взгляды декабристов*, Госполитиздат, 1954, стр. 156-157.

2) А. Г. Мазур. *op. cit.*, p. 94.

3) П. И. Лященко, *Указ. соч.* т. I, стр. 464-470.

むしろ反対に今迄よりも広汎な階級闘争を可能にするものであること。(т. I, стр. 425)

そして一般にプロシア型・アメリカ型を云々するのはデカブリストの段階では早すぎるのであって、この段階における当面の課題はあくまでも反封建制であり、この点でムラヴィヨフの草案が進歩的であったことを認めねばならないと主張していますが、かかる叙述は問題を純粋に経済史の側から見る時、かなり雑駁であるとの感をまぬがれません。

次にペステリの《ルースカヤ・プラウダ》について著者は第十章第七、八節においてその第一ヴァリエントについて解説し、第十二章第四、五節において第二ヴァリエントを説明し且つ第一ヴァリエントとの相違を述べています。著者によればペステリの農業問題・土地分与の考え方は、土地に対する二つの考え方、即ち「土地は公共の財産である」という考え方と、「労働は富の源泉であって、土地を耕作し改良するのはこれを所有する権利がある」との二つの考え方を統一したものであると言います。(т. I, стр. 406, т. II, стр. 77) そしてここからペステリ独特の考え方である「公共の土地」と「個人の土地」という土地二分の考え方が生れたとしています。ペステリによれば全市民は必ずやいづれかのヴォーロスチ(男子千人以上から成る commune)に登録され、この中農業に従事せんと欲する者はこの「公共の土地」から耕作区ウチヤーストクを無代で借りることが出来るとされています。著者はこのことをもってこのプランの目的が小土地所有農民を作ることにあつたとしています(т. I, стр. 418)、「公共の土地」はあくまでもヴォーロスチ全体の所有であることを見逃すことは出来ませんし、従って小土地所有農と言ってもそれは西欧の市民革命後のそれと同一に論ずるわけにはゆきません。むしろヴォーロスチの設立といい、耕作区の貸与といい、ペステリみずからも認めているように極めてロシア的な考え方であつて、そこに従来の共同体的土地所有が大きな参考になっていたことを認めねばなりません。モロゾフやニカンドロフはしきりとかかるヴォーロスチを農村共同体と同一視す

ることが誤りであると強調していますが、<sup>1)</sup> ゲルツェンの《Русский социализм》の理論的先駆者としてのペステリ<sup>2)</sup>の思想を考える時、ネチキナがことさら言及するのを避けているように感じられるこの問題は今後はっきりと解明される必要があります。ロシアの農村共同体の問題はゲルツェンやスラヴ主義者の間だけではなく、ロジコフによりますとペトラシェーフスキーのサークル中 Дебу のグループによっても独自に取上げられた事がわかっていますが、<sup>3)</sup> ナロードニキの前史としてデカブリスト運動を考えるヴェントゥーリが正しく指摘しているように、デカブリスト・ペステリにはっきり見られる共同観<sup>4)</sup>を、ロシア革命思想史の中でどのように位置づけるかということが、本書では未解決のままになって残されています。

デカブリスト運動の中でも特異な位置を占める統一スラヴ結社については、著者は第十四章に一章をさき、それが全スラヴ民族の連邦共和制を目的として組織されていたと言います。(т. II, стр. 149)そして、彼らもまた農奴制に対しては徹底的に反対したが、武力蜂起は否定し、ナロードの自覚のための革命のアジテーションを指向したと述べています。(там же, стр. 163)著者はこのようなイデオロギーからして彼らを後の雑階級の革命家の先駆者であったと言っていますが(там же, стр. 164)この点については岩間教授がこの結社のメンバーを出身階級別に分析することによって同様の結論を出していることを付け加えましょう。<sup>5)</sup>しかしネチキナのこのような主張はもっぱら《Записки Горбачевского》と呼ばれるメモワールに依存して

1) Ф. Морозов, «Экономические вопросы в Русской Правде П. И. Пестеля», Вопросы экономики, 1950, No. 11, стр. 30. П. Ф. Никандров, указ. соч. стр. 113-115.

2) См. Е. М. Филатова, *Экономические взгляды Герцена и Огарева*, Госполитиздат, 1953, стр. 341.

3) *Петрашевы в воспоминаниях современников*, Москва, 1926, стр. XX.

4) F. Venturi. *Il populismo russo*, Vol. I, p. 12.

5) 岩間徹, 前掲論文.

いるのですが、これについてオークニは、これが書かれたのが40年代初頭であって、果して正しく20年以前の結社の考えを反映しているかどうか資料的に問題であると疑問を呈しています。又ネチキナはこの結社の全スラヴ連合の考え方がいわゆるパンスラヴィズムとは全く異なるものである旨を強調していますが(там же, стр. 159-160)この点も今後より明確にさせる必要があるように思われます。

また12月14日の蜂起の政治綱領でありデカブリスト運動の重要な資料たる《Манифест к русскому народу》については第十六章、第三、四節で詳しく述べていますが、そのプログラウがムラヴィヨフの憲法草案よりはるかに進んだものであり、当時としては極めて進歩的であったと結論づけています。(там же, стр. 233-235)

以下第十七、十八章では蜂起の具体的な経過を記し、十九章では裁判を取り扱っていますが、デカブリスト研究の第一の資料というべき、この審問委員会の裁判記録<sup>1)</sup>が昨年ソヴィエトの科学アカデミーからわが国の歴史学研究会に送られて来たことを付言します。終章で著者はデカブリストの流刑と苦役を叙し、最後にロシアの革命運動におけるデカブリストの位置を、レーニンの言葉に従いながら、それがロシアにおける専制と農奴制に対して武器を手にしてたち上った最初の公然たる武装蜂起であることを力説しています(там же, 451-452)。そして貴族の革命家たる彼らの「ナロードとのへだたり」を指摘しつつも、それが後のロシアの革命運動に大きな教訓を与えたことを、有名なプーシキンの詩を引用しながら結論としています。

以上において本書の内容と問題点をごく大づかみに指摘してきましたが、わが国においても今後本書の成果にもとづきながら、前述の資料その他を駆使して実証的な研究を積重ねることによって、デカブリスト研究がより一層進歩することが期待されます。

1) *Восстание декабристов* [Дела Верховного Уголовного Суда и Следственной Комиссии]т. I—VI, VIII—XI. М.-Л. 1925-1954.